柏樹

題字
南　勇　会長
川口市退職校長会
会報　第２５号
令和４年７月１日

人生のカウントダウン

石井　喬

先ず、82歳の小生に、まさかの原稿依頼とは吃驚。人生の終焉を迎えるこの晩年、はてさて何を題材に・・・と迷った挙句、いま胸中に滾っている思いを表現するのが、心底、楽だなぁと悟った次第。

命が閉ざされる時が迫りくる。人は何を思い、何故に生きて来たのか、と問われる。人生の一巻の終わり、つまり幕引きの時が誰にも訪れる。小生に限らず、人生の仕舞い方に屹度いろいろと苦慮することだろう。

昭和14年、東京は北区生まれの江戸っ子。39年、東京五輪の年に、横浜市立大学（仏文科）を卒業後、貿易商社に入社。初任給2万3千円。いずれは海外で羽ばたき活躍できる日を夢見ていたところが何と、年の暮れになり、突然の人員整理。不運にも、人生航路が暗転。方向転換を迫られ、やむなく簿外なるも自主退職。相当悩んだ末に意を決し、退職金の13万円をもって、翌年、母校で英語の教職単位取得のため聴講生に。11月に教員採用試験に合格。12月から鳩ヶ谷中学校で臨時任用となり、翌41年4月より正教員となる。

爾来、34年間、鳩ヶ谷中5年、安行中11年、仲町中5年、十二月田中2年、幸並中4年、芝西中4年、戸塚中3年、計7校を渡り歩いた。その間、3校で管理職を11年勤め上げ定年退職。

その後、巣鴨にある私学、十文字高等学校に再就職。教鞭をとりつつ生徒募集の仕事を8年。そして、今に至る。

人生には常に「あれか、これか」の進路選択の決断を迫られる時が、一度ならずある。

夢と消えた商社マンの道か、進路変更を余儀なくされ進んだ教師の道か、どちらの判断が最善だったのかは神のみぞ知る。だが、自分が信じて決めた道だから、よしとするしかなかろう。

人生百年時代と言われている中、己の人生で『自分が一番輝いていたのは何時だったのだろうか』と、ふと思う。健康な青年が夢見る時の、特有の輝きに満ちた表情の自分がいたあの日には戻れないけれど、その時々の残像は鮮明に脳裏に焼き付いており、決して忘れることはない。そして、生きている歓びの瞬間を沢山与えてくれた家族。生徒達をはじめとして交誼を結んでくださった各分野の方々に、深甚なる謝意を表しつつ余生を過ごしたいと思う。

わずかに残された人生の目には見えぬ終着駅に向かって、旅立ちのカウントダウンが、いずれ訪れることだろう。

授業継続の愉しみ

田丸利雄

今、県内の児童相談所一時保護所にて週1回、中学生に社会科・総合等の授業や個別学習で教えております。

ところで、私は現役時代に川口市内の先輩や仲間と共に、社会科授業実践に努めてきました。その中で、視聴覚資料を、特に「動画資料の短時間活用」をライフワークにしておりました。それが、再任用の授業や個別学習で役に立つとは、思いもかけないことでした。

現在でも、テレビや購入ＤＶＤ等を授業で積極的に活用しております。例えば、「東日本大震災」の「石巻市内を濁流のように流れる津波」に、生徒は息をのんでいました。また、「元気な大阪」の「吉本芸人の楽しい漫才」では、声を上げて笑っていました。

様々な理由で親元を離れて生活する一時保護所の子どもたちは、学力に問題を抱え、経験が少ない子が多いです。そういう生徒にも、動画の短時間視聴はかなりインパクトがあります。

その他に、毎回Ａ３版カラーコピー（地理では観光ポスターも）を多用し、少しでも「わかりやすい授業」になるように努めています。その積み重ねの中で、生徒は「食」や「動物」へ興味が強いことが分かりました。過日も、「寒くてもおいしく美しい北海道」の授業で、「ジャガバター」「味噌ラーメン」「タラバガニ」等のおいしそうな画像に、生徒は興味津々でした。また、静止画像では、北海道から沖縄までの日本各地への旅行で撮影した写真も併用しています。

その上で、授業で提示したカラーコピーは、授業後に必ず廊下に掲示し、小学生への興味づけと共に、職員に子どもたちとの話題作りに生かしてもらっています。

一時保護所での授業も、早7年目を迎えましたが、授業展開を考えている時は、私にとり「至福の時」です。

年齢も積み重ねましたが、もう少しだけ子どもたちに「先生、勉強って楽しいね」と言われる授業に取り組んでいきたいと思っております。

令和４年度を迎えて

会長　南　勇

現在、世界中にまん延するコロナ、及び戦争は子供たちの教育のみならず、あらゆることに大きな支障を生じてきています。このような中で、今、退職校長として、また退職校長会として、何をなすべきか、答えは簡単ではありませんが１つだけ言えることは、かの渋沢栄一も言っているように死ぬ時に残す教訓よりも、生きている時にどのような行動をとるかが重要であるということです。私たちは今いわば未曽有の危機に瀕しています。その中で自分の命をまず大切にし、次に身近なもの、小さなことから行動にうつしていくことが大切だと思います。そこで今年度特に２点について取り組んでいく所存です。まず１つは躍進著しい川口市立高校及びその付属中学校への支援です。（紙面の都合上、この点については省略させていただきます。）次に２点目は地域・保護者との連携です。本市はさきの戦争で焦土と化し、教材もない、まして教える指針となる指導要領もまだない中で、川口の教師は市民の中に入り、市民と共に「市民の子供の教育は市民の手で」を合言葉に、あの素晴らしい川口プランを発表し、日本中の教育を席巻する金字塔を打ち立てました。教師は、数年ごとに学校を異動しその都度学校に新しい風を吹き込んでいく、いわば風の人と言われます。一方その土地に根付いた地域の人・保護者は土の人と言われます。土の人が育てた子供たちをより良い方向に育てるために風の人である教師は子供たちに時には温かい風を、時には冷たく厳しい風を吹かせながら子供の成長を願っていく。この風と土の人との融合がその土地の風土をつくりやがて、それは地域の教育力を高め、ひいてはその地域の文化を形成することになります。今、新たな戦争やコロナ禍で人類の未来がみえない時代だと言われておりますが我々大人が今こそ地域に入り地域及び保護者と一帯となって、未来を背負って立つ子供たちの教育にあたる時、歴史の未来がみえない時代を切り開いていく活路になるのではないでしょうか。退職校長は風の人であり、土の人でもあります。その退職校長の集まりである退職校長会が学校・地域に入り、子供たちに学ぶことへの興味、関心及び知への情熱を燃えあがらせる導火線になればと思っております。かつて76年前、あの焦土と化した川口の地に素晴らしい川口プランを打ち立てた時の情熱をもって。

米寿並びに瑞宝双光章おめでとうございます

篠塚文男　先生

小林博武　先生

日々雑感

新生活様式になって

安藤比呂子

退職後、再任用として初任者に係り三年が経過しました。三年間で中学校十三人、小学校一人の先生方と出会いました。教師となって一歩を踏み出した先生方が笑顔で生徒の前に立ち、自信を持って指導に当たれるよう机上研修と昨年から導入されたＯＪＴ研修を進めています。

しかし、この三年間で社会生活がこんなにも変化するとはだれも想像していなかったと思います。コロナウィルスの流行により安穏とした生活が一変しました。

突然の緊急事態宣言にまん延防止と、日常生活も学校生活も変わり、マスク、手洗い、うがい、三密の徹底となりました。学校に生徒がいない状況の時は、本当に心配しました。その後、分散登校、オンライン授業の実施と、学校に生徒がいることにホッとしました。

今は、何ができるのか探りながらの教育課程の実施となり、学校行事は感染防止のためできないこともあり、部活動の大会も開催できないこともありました。

学校行事は、目標に向かって生徒達が準備し、仲間を作り上げていくことで達成感を味わうことができ、生徒が大きく成長する大事なものと捉えています。その学びを生徒に体験させられず、教科指導だけでは体感できない生徒を動かすという特別活動の指導を初任者が経験できずにいます。

コロナ禍のため、現地に出向いての研修がオンラインになり、同期という横の繋がりが持てずに一年間が終わってしまいます。先生方は今までにもまして忙しく、これまでもあたり前に行っていた健康観察の徹底、欠席、遅刻、早退の対応も人数が尋常ではないです。

一人一台のタブレットによる授業の準備、日々の教材研究、生徒指導、そして保護者対応と多くの時間を費やしています。そんな中でも、生徒の心に火をつけられる教師としての資質を高めていけるよう初任者と向き合う日々を大切にしています。

また、第二のライフスタイルとしてこの仕事をしながら、休日には旅行に出かけたり、友人とゆっくり飲みに行ったりすることを楽しみにしていましたが、今は我慢を強いられています。

マスクが顔の一部となって、ワクチン接種の推奨、毎日の感染数とにらめっこしながらの新生活様式もいつまで続くのか、はやく平穏な生活が戻ることを願っています。

新たな二足のワラジと履き続ける一足のワラジ

多田出　正

退職して5年が過ぎる。以前は「退職後は悠々自適」と言われ趣味や新たな学び、地域貢献やボランティア等、希望する道を選択し第二の人生を始めることができた。60歳定年は変わらないが、以前とは違い今は、退職しても一定期間働かないと生活していけない人もいる。私も「イチバリキ」だったので、退職後すぐにスクール・サポーターとして再就職した。一日違いで同じ県職員でも、所属が教育委員会から警察本部になり常勤が非常勤になり、給与も減った。別組織の所属となったことで「新入社員」として戸惑うこともかなりあった。半年ほどして某私立大学教職課程非常勤講師の誘いがあった。スクール・サポーターは非常勤なので、勤務日以外土・日ならば、兼職願を出すことで可能とのことで退職2年目からは「二足のワラジ」を履くことになった。前期15時間の講義だが「教える」ことは20年ぶりであった。（行政・管理職期間が20年あった）小中と違い、シラバス作成からテキスト等の決定まで、全て計画しなければならず、半年間の講義準備には、週末殆どすべてを費やした。今思うとかなりハードワークであったが、退職後また一つ新たな挑戦ができるワクワク感の方が大きかった。初講義では、学生の反応一つ一つが新鮮で前向きであり大変感動した。令和2・3年度はコロナ禍により全てオンラインで講義する貴重な経験もした。一つのことをじっくり長くやることが向いていない性格もあってか「二足のワラジ」での日々は充実したものとなっている。どちらの仕事も、アンテナを高くし最新の教育情報を知り、理解していないと仕事にならない。知人には、退職前と変わらないじゃないかと言われるが、自分が好きでやっている「二足のワラジ」では、視点が違うからと言っている。

履き続けている一足のワラジは、ライフワークとしている『通常学級に在籍する配慮を要する児童生徒の支援』について勉強する「ネットワークの会」の運営である。二カ月に1回程度、教育・福祉・医療・民間事業者等関係者が集まり、様々な分野の専門家から最新情報等を学ぶことが目的の会である。コロナ禍での講演会等の制限が続き、2年半近く開催できていないのが今一番辛いことである。適切な支援が受けられず、辛い思いをしている児童生徒への支援の活動には、最後まで係わり続けたいと思っている。

ウォーキングの楽しさと埼玉の新たな発見

佐々木　和弘

可憐なさくら草がかわいい道満パークとさくら草公園。一面に咲き誇る芝桜と武甲山のロケーションが素晴らしい秩父・羊山公園。歴史的建造物や由緒ある寺社、気持ちも和らぐ町並み豊かな川越。新緑がまばゆい宮沢湖畔の「メッツァ」&「ムーミンバレー」。交通の要所と経済発展の形跡が残る熊谷。荒川の土手いっぱいに広がる曼殊沙華と富士山・鉄道のコントラストが絵画のように美しい彩湖。そして、大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」で話題になっている切り通しなど、自然の要塞が実感できる鎌倉の山間。ウォーキングを始めてから住まいの周辺や様々な場所に出かけ、新鮮な気持ちで毎日を過ごしています。

あらためて体を動かすことと、自然等に触れることは、心をより一層豊かにしてくれるものと実感しました。

定年退職後、再び校長として1年間の再任用。そして教育相談員として2年間を勤めました。その後はゆったりと残りの人生を過ごしながら、現役校長の妻を支えていこうと決心しました。その毎日の暮らしの中で、家事に勤しみながらウォーキングを始め、歩くことの楽しさを覚えてきました。月1、2度程、いくつかの組織や団体の手伝いやボランティア活動も行っておりましたが、昨年の11月からＮＰＯ法人「埼玉県ウォーキング協会」の仕事をさせていただくことになり、新たな学びや発見、人との関わりなど、楽しさが増えてきました。

週2日の担当業務が中心ですが、月に2度の平日ウォークと週末の例会ウォーク（約10キロ超）、ツーデイやスリーデイ等の特例ウォークの役員担当業務及びウォーキングで早朝から出かける日も多くなりました。毎日が忙しくなった半面、特に今まで知ることも出来なかった埼玉県の素晴らしさを数多く知ることができ、貴重な財産を得たと感じています。

これからも毎日の家事やウォーキングなどをゆとりをもって行いながら微力に過ぎませんが出来ることを手伝い、より多くの新しい発見や学び、楽しさを味わっていきたいと思っています。

体を動かすこと、無理なくウォーキングをすることにより、相談室を辞めて5キロ以上体重も減らすことが出来、体調はすこぶる良好です。ちなみに2年間で4300キロ以上歩きました。

健康教室のウォーキングに参加したり、県ウォーキング協会の会員になったりし、健康増進をお勧めします。

教育情報

自ら学び、共に学び合う児童の育成

川口市立原町小学校
校長　加田　明

一　はじめに

令和元年・２年度（新型コロナの影響を受け３年度まで実施）に川口市教育委員会の「学力向上に関する研究」の委嘱を受け「自ら学び、共に学び合う児童の育成」を研究主題とし全教科で研究を進めてまいりました。

これからの学校は、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められています。そのためには「すべての子供の学びを保障する」と同時に「学び合いによる協働的な学びを実現する」ことが必要であると考えます。

そこでまず、誰一人取り残すことなく、すべての子供が安心して楽しく学ぶことのできる環境を構築し、子供同士が互いに「尊重」し合い対等な関係のなかで違いを認め合う人間関係づくりを行います。そしてあらかじめ期待された通りの答えを出すのではなく、探究的に自ら問いを立てて、多様な人々と協働しながら独創的な発想で新たな価値を創り上げる「創造力」を培うことを目指し研究を推進しました。

二　研究の実践内容

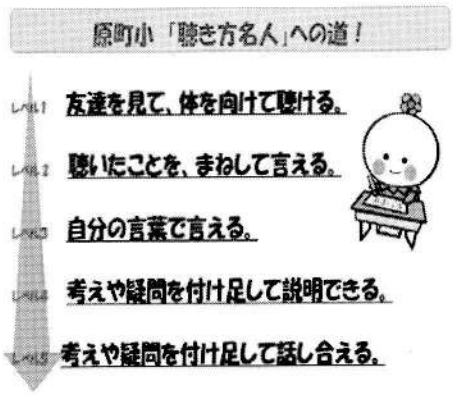
（ア）基本的な机の配置を前向きからコの字型へ

子供たち同士の顔が見え、言葉を届けたい人の顔が見える型にすることで、子供たち同士の考えがつながり、対話が充実する。

（イ）グループによる学び合い

低学年はペア学習、中・高学年はペアを基盤とした４人組のグループによる学び合いを行うことで、互いに協力し合い、助け合いながら学習を進めることができる。

（ウ）「聴き方名人」（話の聴き方段階表）の作成



仲間と関わり合い、学び合いながら課題を解決する学級の姿を段階表にして掲示することで、子供たちに今の学級の実態を意識させ学び合う態度の育成に繋げることができる。

（エ）教員の授業に対する意識改革

・すべての教員が一人一授業公開を行い、互いに授業を見合い、学び合う同僚性の構築を行う。

・研究授業は、教室の後ろから先生の板書のしかたやわかりやすい指導技術を見るのではなく、教室の前から子供たちの表情や学んでいる姿を見るようにする。

・挙手している子、わかっている子の発言に注目するのではなく、わからないでいる子、間違ってしまっている子供に注目し、その子の「わからなさ」や「間違い」を大切にしながら「すべての子供に学びが生まれる授業」を目指す。

・教師は「教える人」ではなく「子供と子供を繋ぐファシリテーター」としての意識を持つ。

三　研究の成果

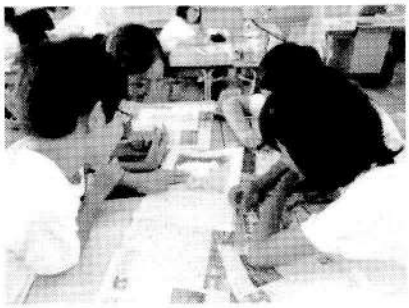
・グループ学習により子供たち同士が常に繋がっている安心感が生まれ、疑問があればいつでも自然と相談し合える環境が構築された。

・友達と考えを交流したり相談したりして、高いレベルの問題に対しても諦めずに取り組む態度を育成することができた。

・多くの児童が「わからない。ここを教えて。」と言えるようになり、聞かれた児童は相手が納得するまで説明しようとし、支え合う関係が成立し、自己達成感や自尊感情が育まれた。

四　おわりに

研究発表会を新たなスタートラインと認識し、学び合いの質を高め、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育み、学校で学んだことが、子供たちの明日、そして将来につながるものとなるように努めてまいりたいと思います。



編集後記

会報「柏樹」第25号をお届けいたしますと共に玉稿を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

３年目となるコロナ禍、少しずつ落ち着きを取り戻しつつありますが、まだ終息は先のようです。感染対策には十分ご留意ください。　（林　俊幸）